

器の損傷による症状が重篤かつ急激であることもあり、早期診断が必要とされる。外傷性気管・気管支損傷は気管分岐部より2.5cm以内に発生することが多く、鈍的胸部外傷後の皮下気腫、縦隔気腫、大量のair leakを伴う気胸、呼吸困難を呈する患者には気管支鏡による精査が必要であり、経過遷延による損傷部の癒着性狭窄や閉塞による感染や無気肺は、気管・気管支形成後の肺機能にも問題があり、可及的に早期診断、早期外科的修復が必要である。

3) 当院における腹部大動脈瘤緊急手術例の検討

丸山 行夫・小菅 敏夫 (新潟こぼり病院) 心臓血管外科
山崎 芳彦 (新潟市民病院) 胸部外科
江口 昭治 (新潟大学第二外科)

当院では、1984年10月から1989年6月までに、腹部大動脈瘤の緊急手術を8例行った。症例は、男性6例、女性2例で、破裂性腹部大動脈瘤が5例、切迫破裂が3例であった。1例を除き、人工血管によるグラフティングを行ったが、手術死亡(DOT)は1例、病院死亡は3例であった。術中出血量は745mlから6750ml、平均3116mlであったが、自家血輸血システムは有用であった。

破裂性腹部大動脈瘤では、早急な手術治療が必要であり、疑わしい場合には手術治療が可能な施設への早急な搬送が望まれる。

4) 創外固定による四肢骨折治療経験

岩瀨 泰宏・勝見 政寛
山本 康行・今井 春雄
谷代 弘三・関谷 繁樹 (新潟中央病院) 整形外科
穂苅 豊・勝見 裕
田島 達也・吉津 孝衛 (新潟手の外科) 研究所
牧 裕

はじめに

近年、交通事故や労働災害の多様化に伴い広範な皮膚軟部組織の欠損を伴った四肢開放骨折も増加している。私たちは整復位保持のむずかしい関節周辺の粉碎骨折、広範な軟部組織損傷を伴う開放骨折、骨髄炎を合併した症例に対し創外固定を使用しているので報告する。

症例

1986年から89年の4年間に当科で治療した20例で内訳は男性16、女性4で年齢は16~63才平均35才である。創外固定使用部位は、上肢では上腕骨1、前腕骨7、指骨

2で前腕骨骨折に多くこのうち6例が橈骨遠位端粉碎骨折に使用されていた。一方下肢では大腿骨1、下腿骨9で、下腿骨骨折に多く軟部組織損傷の激しい開放骨折に多く使用されていた。

以下各装着部位ごとに代表症例を呈示する。

5) 小児重症型肺炎の1例

松田由紀夫・岩瀨 真
大沢 義弘・内山 昌則
広田 雅行・内藤万砂文
八木 実・飯沼 泰史
大谷 哲士 (新潟大学小児外科)

重症急性肺炎では肺炎周囲組織の病変に加えて、多臓器障害を伴う為、その死亡率は極めて高い。我々は最近、小児では稀な重症急性肺炎の1例に腹膜灌流、血漿交換を施行し救命することが出来たので報告する。

症例は10才の女児で、マイコプラズマ肺炎の治療後、昭和64年11月24日上腹部痛と嘔吐を主訴に小児科を受診、急性肺炎を疑われ加療を受けたが症状改善が認められず、翌日当科入院。保存的治療にかかわらず腹痛、腹部膨満、呼吸困難の増強、上部消化管出血、Grey-Turner 症候、FDP 上昇が認められた為、重症急性肺炎と診断。入院5日目より17日目迄腹膜灌流を、6日目と7日目に血漿交換を施行した。4月1日当院を退院したが、現在もインシュリン約20単位を連日使用している。本症例はミノマイシンによる薬剤性肺炎と考えられ、重症急性肺炎に対する治療としては腹膜灌流、血漿交換で救命出来た本邦で最初の小児例であると思われる。

6) 長期にわたる集中治療により救命し得た重症出血性、壊死性肺炎の1例

吉川 恵次 (新潟大学附属病院) 救急部
白井 良夫・杉本不二雄
大谷 哲也・小山俊太郎 (新潟大学第一外科)
殷 熙安・佐藤健比呂 (同 第二内科)
森岡 睦美・西村 喜宏 (同 麻酔科)

症例は71才、女性。胆石症の既往、飲酒歴は無い。悪心、嘔吐、腹痛をもって発症。某病院にて急性肺炎と診断され、保存的療法が開始された。しかしながら状態の改善は得られず、呼吸不全、腎不全(non-oliguric)、DICを併発、当院に紹介された。入院時preshock状態であり気管内挿管による呼吸管理を開始。輸液、輸血、血清電解質異常の補正、カテコラミン、利尿剤による尿量の確保、血液凝固異常に対する薬剤投与等も同時に開始した。入院時の全身状態および諸検査結果からは手術によっても良い結果は得られないであろうと判断さ